

ネパールの床屋 その2

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダーブ ナラエン

人生の節目節目で必要とされる床屋の役割の代表的なものには成人式、結婚式、長寿の祝い、不幸があった時の散髪があります。どれも出張してやってくれるので便利です。

ネパールでの成人式は男女での儀式に違いがあり、床屋が必要とされるのは7歳から15歳位までに行う男子の方です。男子の成人式はプラタバダと呼ばれ奇数歳に行います。後頭頂部に2、3センチ髪を残し断髪する際、最初の一切りだけ鋏を入れるのは母方の弟で、その後、家族や親せきの年上の男性が鋏で軽く触れたり、少しだけ切ったりして、最後に床屋がきれいに仕上げます。何だか関取の断髪式に似ていますね。切った髪は床に落としてはならず、母方の弟の嫁が器に髪を受け止めます。髪は全ての行事が終了してから、聖なる川に流します。2、3センチ残った一房はトゥピと呼ばれています。ネパール帽のトピとは発音が違います。一説によるトゥピは情報を得るためのアンテナだとされていて、触れてはいけないことになっています。しかし昔からの言い伝えでは、子孫繁栄の印としてのものと言われています。特にブラフマン、チェトリ族は成人後、一生続きます。髪が伸びてもトゥピの部分だけは2、3センチ長くしています。



幼い息子の散髪に付き添う母親

結婚式でも男性だけになりますが、トゥピを残して断髪します。そして儀式にはトピ(ネパール帽)を被ります。ネパールで正式な行事には必ずトピを被ります。断髪は身を清める意味がありますが、今は町ではあまり見かけなくなりました。

長寿の祝いはネパール歴で数え77歳の7月7日に行います。正確に言えば、当日の7時7分7秒と7が揃った時です。儀式に際し、手足の爪を切り、足には指先から5cm位までを赤い色で塗ります。これは床屋の奥さんの役割です。男性はトゥピを残して断髪します。

親が亡くなった場合、しきたりでは火葬に際し父親の時は長男が最初の火を入れます。母親の時は末息子が火を入れます。最初に火を入れることをダグバッチイと言います。火葬後に息子全員と近い親戚の男性は髪、髭、眉毛を全部剃ります。近くのドゥンゲダラ(石の蛇口の意味)という共同水道場や川沿いで身を清めてから床屋に剃ってもらいます。その時もトゥピは残します。息子が仏教のお坊さんの場合はガート(寺院がある川沿いの場所)で断髪し、トゥピは残しません。死後10日、45日、6ヶ月、1年、2年と法要を行い、断髪しますが、断髪に関しては時代と共に変わってきてはいます。

ネパールは多民族国家なので儀式や生活習慣には、それぞれ違いがあります。宗教が違ってくると尚更です。

そして、ネパールはお祭りの国です。一年を通して国や町のあちこちで何かしらの祭りや儀式が行われています。そのようなことから床屋はなくてはならないものになっています。